

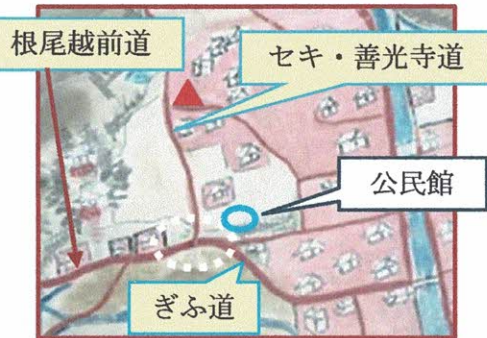
木知原の今昔!

31号: 6・1・26

地蔵尊(其の一)

👉 11体中5体に 50里(200k)も先の善光寺案内!

- 村内の5体の地蔵尊に善光寺への案内が彫られている。
- 🌀 地蔵尊は道標が立ち人の往来が盛んになった江戸時代中頃から旅人の安全と道案内を兼ねて祀られるようになった。
- ♥️ 下記は善光寺への案内が見られる地蔵尊5体である。



📍 公民館の西辺りが根尾・セキ・岐阜への分岐点で、道標・地蔵尊・高札場等が集まっていた。

1. 集荷場脇の地蔵尊

- 📄 地蔵尊①は、明治20年・中屋敷在住・名知一馬氏寄進。
- 🌀 案内に「右・せき善光寺道」とあるが「左方の案内」がなく珍しい地蔵である。明治20年頃も巡礼が盛んであったことがわかる。林茂氏は『明治末でも谷汲山開帳時には終日人の流れが途切れることはなかった』と話されていた。
- 🌀 像顔がとても穏やかで心なごむ地蔵である。とくにご覧あれ!!



- 📄 地蔵尊②は、山県郡大森村の有志寄進。
- 🌀 案内に「此方・せきぜんこうじへ; 右ハ・ぎふかのうへ」とある。
- 🌀 山県町史に「大森村から木知原を通り谷汲山への巡礼街道が早くから整備されていた」とあり大森村の有志が木知原にまで地蔵尊を祀っていた。
- 🌀 当初は公民館西側の分岐点と思われる。地蔵上部に「三番」とあるから街道に沿って何体も祀られたのでしょ。他番の所在が知りたいものである。

2. 上屋敷長谷川沿いの地蔵尊(名知和男氏宅前)

- 📄 地蔵尊③は、当初山裾の旧道に祀られていた。案内に「此方・せきぜんこうじ; 右ハむら道」とある。「村道」とは珍しい案内であるが多分居宅が平地に移り始めた明治中頃の寄進と思われる。



3. 上岩崎の地蔵尊④⑤にも「せき・ぜんこうじ」への案内が彫られている。

にぎわった木知原村



雑感

- ♥️ 地蔵尊に50里も離れた善光寺への道案内が多く彫られていることから巡礼ブームのすごさが推察できる。
- 🌀 木知原には旅館・商店・出店が並ぶ等宿場の様な賑わいとなりその変容ぶりには村人自身がビックリしていたことでしょう。
- 🌀 道案内を眺める木知原の村人も善光寺詣でが夢であったことは、昭和30年頃まで「善光寺講」が続いていたことから伺われる。(岐阜駅から一泊二日の善光寺参りツアーといった内容)
- 🌀 但し当時の旅は庶民のみで支配層の武士は江戸の勤番でさえ江戸から出られなかった。国元でも領国内の限られた範囲で窮屈な暮らしであった。きっと庶民の旅はうらやましかったことでしょう。
- ♥️ 旅は庶民(農・工・商)の特権? 税さえ納めれば・・・と早合点しそうであるが、旅どころか飢饉に苦しむ農民が江戸末期まで全国各地に見られたことを考えれば、一般庶民(特に農民)が湯治や神社詣でが出来たのは明治になってからでしょう。地蔵尊①が明治20年に寄進であることもうなずけるようである。
- ※いつからか分からないが上岩崎の土産物「おだい餅」が明治末まで有名であったと聞く。